

027  
405  
1

雪乃歌仙

元祿  
一  
支



027  
405  
/

愛知女子専  
第 11466 冊  
圖書

星雲の日は元くけく愛出居乃下に能籍とんて  
ふあしあふ志信んて居をそく人者火成ふく  
かあり中くくはるる一羽海はよれちり  
くしあり功く度乃先ちり一立  
居久一ちて六竹形松倒て戸を  
あつ一とつるや中八書下一ちりつて  
暫時の百ありれさお都一ち居仙ちん  
交りりち扱お月事れ六明くくそれち  
そ志けつに先かの結さやとくひかりて  
あられいふ八とくこれあ又ゆ。

麦 攝月 中甸 雪芝

一五五

11711  
8/2



移之 札をりや雪のかり種。雪芝  
日及之 札この志移身 山景志 柗巾  
ひつそりと虫物あれはうちふぬく 柗若  
お宅形 紙子ちるくくまのいや 近之  
好焼く 音附る音の音い親 秋風  
あふあれはかりく 芝

雪二

五さく凡粉乃莖のさく免と水  
さあ〜ひまの 内々やいてゆ〜  
水のおく川も〜廣く如く〜  
わ〜くと敵乃 夜明る里より  
わつ〜た事〜のいさよひり信  
連立如る里より乃 中  
燻るきの晚〜掃際能わて 中  
日氣さ〜 志つ〜川〜 あり 之

見〜す〜地蔵所 中  
波〜乃 舟如 増の〜 やる 芝  
河〜いひ〜ひ〜の遠〜花のゆほ 巾  
曇る〜ぬ先〜種畚〜り 中  
彼岸さ〜せん〜〜る古乃 門 之  
夕〜昼〜ま〜 田東川 見る 芳  
一畝乃 跡の 杉合を ありさして 芝  
枕焼 使い〜ま〜連り 中

毎の音日け此の程と  
あまんと飛べ人可祝うれ  
日の光ハワの光を物さひ  
啼く水鷄乃をうらちく  
屋へおこ筆一川せけて暫  
樓をへまの里この 了  
友達のとく九八丹見あつかり  
秋を扇の見せ仕舞 ぬ里 芳

綿<sup>ワ</sup>はさうし取神のちりひくを  
七口かいらく風のまへく 巾  
富士近記名所をのこま真あく 呂  
二階より下里 湯衣着て飛ぶ 之  
人あのみんこ花もさつと見く 芳  
と氣をく九八 衣をされ 巾

大根葉乃雪白何根在<sup>心</sup>の<sup>う</sup>那<sup>あ</sup>芳  
夜のあつくあ<sup>る</sup>日<sup>も</sup>本<sup>立</sup>と<sup>も</sup>雪<sup>蓋</sup>  
若<sup>く</sup>は<sup>又</sup>双<sup>織</sup>て人<sup>乃</sup>兄<sup>か</sup>ん<sup>近</sup>之<sup>近</sup>  
亭<sup>主</sup>の<sup>あ</sup>さ<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>と<sup>あ</sup>ら<sup>り</sup>と<sup>せ</sup>ぬ<sup>托</sup>巾<sup>中</sup>  
涼<sup>し</sup>九<sup>も</sup>松<sup>も</sup>く<sup>せ</sup>く<sup>月</sup>の<sup>氣</sup>杜<sup>若</sup>  
鮫<sup>徒</sup>已<sup>竿</sup>城<sup>名</sup>の<sup>形</sup>す<sup>る</sup>若

色<sup>は</sup>八<sup>折</sup>も<sup>明</sup>い<sup>そ</sup>ぬ<sup>心</sup>ひ<sup>り</sup>芝<sup>之</sup>  
門<sup>立</sup>坊<sup>子</sup>一<sup>言</sup>加<sup>く</sup>く<sup>く</sup>子<sup>之</sup>  
梅<sup>持</sup>く<sup>た</sup>い<sup>く</sup>落<sup>手</sup>夏<sup>乃</sup>衣<sup>巾</sup>  
九<sup>日</sup>乃<sup>酒</sup>を<sup>樽</sup>子<sup>く</sup>く<sup>く</sup>花<sup>の</sup>  
糸<sup>う</sup>福<sup>の</sup>糸<sup>の</sup>く<sup>く</sup>く<sup>く</sup>花<sup>の</sup>  
宵<sup>の</sup>き<sup>く</sup>く<sup>く</sup>く<sup>く</sup>く<sup>く</sup>花<sup>の</sup>  
枕<sup>枕</sup>を<sup>清</sup>可<sup>く</sup>人<sup>乃</sup>是<sup>の</sup>音<sup>之</sup>  
高<sup>反</sup>く<sup>く</sup>く<sup>く</sup>く<sup>く</sup>く<sup>く</sup>巾



是く中過乃處屋を定り先之 芳  
凍る中ゆくき小姓尻ねり 芝  
目のよ紙 何れをやり 留る花 之  
浦乃台やれ 初門よりとま家 巾  
乃筋ハ 花んる為又 留る花と玉 有  
幾も小蝶の 夕日 ちりり 之

りの夜や軽乃ちりりと 雷花あり 近之  
炭を引 熱く焼くつ 持る也 出芳  
赤板又持る来る酒を脱るれく 雷芝  
いつ降とやら 藤とぬれたり 花若  
春いつところの小火り 鳴る聲は 托巾  
跡をやらいつく ちりり 赤い 赤 之

ゆつふりと露やれくと露をうて 芳  
わりの入りの 服へとり 室 芝  
まけの遠く 蕨乃 花の 花  
江戸へまゝろハ事分行く 巾  
松篁は霧を指とら掃て 捨 之  
まゝめく のいひひり 吟 芳  
んごう丸る引て 糸を 撫き 芝  
を 衣の 志る 巾 中 袖おひ 佐 女

入目の分り 静乳 山乃 陸 巾  
高介子 大芥門 右 正川 左 室 之  
花揃く 坊主の 七の 書物 見 世 首  
長乃 昔 供 始 亦 佐 来 寸 寸 芝  
砂 更 足 か き ぶ せ へ 室 配 とも 首  
む 里 小 た の こ へ 木 賃 へ 之 巾  
隅乃 方 巾 ち ち ち 火 丸 五 葉 丸 呂 之  
女子を人こ 見 ぎ 娘 曹 の 間 首



婦しくとまゆく海内編中 芝  
 何れそあうく水理如来立 有  
 賣物乃おらぬものう川沿し 巾  
 男乃分毫はに後ハ 菊之 之  
 床死平来し引下す夜の物 芽  
 七日さると急佛も形ハ 芝  
 板乃亦く堂し砌乃母の親 有  
 物产かまじけ 是な有る 巾

いろふれおのうちに答はる 之  
 岩乃まはるま 庵室の 名 芳  
 雷降し小思津乃方の人を縁 芝  
 ちつと鳥乃たうぬ云 介 有  
 其の如くまありく中 是乃 咲 巾  
 振へおれハ 鳥の あく 加 筆

春と一川打て二節長や雷の初雪並  
けらる池平鴨くりに墨林  
夜寒くと春の月のあけ如く花巾  
二人くさる水あらしす  
ふる土乃桑て貫あて礼をいふ  
果ていれとあけぬ日乃中

か入る船すい袖乃垣の口 芝  
松林くみく 多れあけはく 日  
熱くく水玉舟の荷を運ひ 舟  
切程よりて豆腐やくく 芝  
仍焼の煙乃乃女のおわい 舟  
琴習うく上扇あけいさき 日  
片眼乃方へ草履をよせし 巾  
綿とり房 高き道く 芝

名月より本質乃密のうへに  
勢を修り初めてかへり  
一志を以て吹込ちる風の風  
跡生ふあまの 唯礼の足  
+ 春風乃ありくた牛を追ひて  
ありとありとありつまの足  
あまの 風長衣包何々  
肉入まのれを泣くはく  
日 巾 笠

とこれ事々神よの神造り  
唐一て石てさくぬ歌く  
とやくとと挽唱しる唐の瑞  
夜も過り乃ててぬあ口  
あ尻の尻をぬえあく三人連  
やうて九日乃唐の月とあ  
比西乃あまのれよさの自のま  
横賞山子つきあては  
日 巾 笠

天神乃 神楽と痛ても笑へり  
如直 遠くく 遠くさいつと  
勝手はと病人 少佐の静るは  
草履下 一と子もわらふ  
まらつとと 沢山又笑はるの山  
お茶乃 ちる 天守おれり  
中

山々乃 乃てあそく 香吹うね  
場の 雨り 西橋あり 一 羅く 素  
繙く 里先ちと 斗り 静りて 香  
治る ことく ぬれん ちひつり 近  
子 輪 けく の 白ひ 月の 照り 芳  
を 里 浅笑く 心を 振し 見る 香

雲物小枝梅也あゝまゝあり  
 くら梅子くゝ樹と衣や  
 汗服へ衣を突すゝんを  
 樹をきくくくくくくく  
 いきく子て手貫乃銀の神造り  
 あゝれゝまきのさゝくまゝ  
 長風呂と人の次子あゝや  
 あゝろあゝろ木づく継ぐく  
 之 之 之 之 之 之 之 之

夕めーま双と才へ月と衣  
 形るあゝくみひふるの  
 花咲くく人乃世木の舞衣  
 くらくくくくくくくくく  
 梅のまろくくくくくく  
 簪を一せん衣へあゝり  
 菊と衣くくくくくく  
 形能きり立改くくあり  
 之 之 之 之 之 之 之 之

あ他の生々とは紙入毒く  
焼介と山乃本とをらひ死  
江戸よりのおは屋と名乗るく  
よの雨つきま田とくはるや  
下町乃古扱お餅を祓ひ来る  
お珠とをさぬ老の袖口之  
桐の葉お蔭初めくまりの乳  
むくけ乃吸く乃とくはる  
之

う  
お魚と小娘の事とをわけて  
とまふくせむ心ん付せり  
手あかりの雨と氣の風の響あり  
あゝあゝあゝあゝあゝ  
おはさかるとおはさかると  
くちを操くの死と自業に之

お芽根土も歯出大内庄の唐西く  
氏徳の人あつてうまの弟遇ふを  
好まふハまゝと構へて上野の斤隔く  
弟唐瓜酒ひく意氣のまゝ唐瓜と  
ゆゑあつて乃一幅を奉るにひと死に  
世にありし唐瓜をいふまゝに唐瓜を  
めぐる癩あるまゝに唐瓜をいふまゝに  
唐瓜風唐瓜をいふまゝに唐瓜をいふまゝに

伊賀の連虎乃あつて唐瓜風何れに唐瓜  
糸くひく唐瓜もあつて唐瓜をいふまゝに  
唐瓜をいふまゝに唐瓜をいふまゝに唐瓜を  
唐瓜をいふまゝに唐瓜をいふまゝに唐瓜を  
唐瓜をいふまゝに唐瓜をいふまゝに唐瓜を  
唐瓜をいふまゝに唐瓜をいふまゝに唐瓜を  
唐瓜をいふまゝに唐瓜をいふまゝに唐瓜を  
唐瓜をいふまゝに唐瓜をいふまゝに唐瓜を

雪は興あり—と雪乃を春仙と詠—  
牛乳小冊独まじりしふるをのつゝ阿と  
ねま風のねんま位入ふあゝまの園ふ  
うたあゝまゝとまゝ今月三日を廿七日の  
正高とまゝ折あ—雪は縁事集の巻後  
入其まゝ人〜〜〜にあゝまゝ春仙と  
元初〜〜ねまのまゝをほく〜乃ん〜  
孫雪の一まゝをつゝ〜牌あゝまゝあゝ

雪を懐くは相由傳く述

安永八年庚申月十八日  
お義忠庵無り

帰あゝまゝや〜度乃まゝめしゆゑ雪 相由  
あゝまゝ何り〜指乃 而屋せ 浮流



藤つゝ想おぼり此のありんらんを栗  
 うゆきら〜〜と氣地の有るこ 槐主  
 坊〜〜と無の葉未だ丹〜〜と 長英  
 花〜所〜〜ぬ 柴 栗 長川  
 負〜子姑取西春岸の冷度〜 杜若  
 何地へのハ〜〜と男 ぬ 曾叔  
 彩の首ら〜あけ〜樹地 下 松舎  
 帯入の〜〜鞠乃ほと〜 鞍友

新夜言と麻疹の泣乃響〜友固  
 土用の風子 鉢〜〜 鉢 魚白  
 三日よん夕世〜〜と書花丹 竹風  
 仲〜あつ〜わ〜〜と西 鉢 鳴 一舟  
 島枝の多母橋板をぬ〜 里 賣常  
 〜〜海〜〜とあ〜人の 浪 楚江  
 留〜子の〜と管白かた〜の〜 重厚  
 田〜〜角〜〜と摺神乃 中 尾二

ふりくるとあはれ人ぞくくさるる葉  
 子守の過ぎ代へ過し小節ふき  
 何となく人びとへくくさるる  
 めあるる目も形も何ぞ 一月  
 初身命の標は四つめは取らば  
 暖屋をくくさるるつとあうる多  
 降るる小雨の砂へ入るわさり  
 年引つてく寺姑 杖木 舎

まうとくさるるあはれ人ぞくくさるる葉  
 了拍の面乃鼻つぬきくく  
 宵更のあはれとくくさるる  
 陸中より川も河鹿鳴ふり  
 官よりふあはれ人のあはれ  
 何となく男 回士 髪を 結合  
 何となく入るる火の光りくく  
 何となく入るる火の光りくく

秋 厚 船 音 江 風 二 雪

老々所のおもひおせん 日記 舟  
むくしと今くみりおきや 業

追加

春めくや板屋根もく。梅乃るる 貞照  
力形く水体くくくくくハ 廣電  
よふ此日の中へ堂母一梅の茶 倉橋  
吉手精一 杉の標 是日 吉手 松倉  
日よまかす 蝶々くくくくく 曾秋  
あ〜〜や 田んぼく 地原く。 尾二

出さくくも遊こぬりんを  
 樽主  
 蝶々の陽と所を 梨木のてふ 在亭  
 せし一宗言意ひくや 梅雨の内 僧 子守  
 飛燕のうさねおまうく 西蛙 如竹  
 さひしきの隙もいつく 友柳 岷舟  
 穉毒や去るく 跡は 滝水の元 杜青  
 新船の 舟をさる大姑 新可粒 吳川  
 中さありの 舟は 秋の嵐は 冬雪

増勢や入日くやく 雁根乃 桶 櫻江  
 月ありとありあよ 跡の言 扇尺  
 舟を流しき 秋の海や 枯尾花 花英  
 木くくく 嵐ありとく 雲をさる 新魚  
 こゆ 空味さつくと 雲をさる 桐雨  
 加し 蛙や大の 跨りく 舟りり 一舟  
 空の月のかく 雲りや 舟をさる 浮流

竹  
月  
長

管身よ赤り字跡戸の雲うらん  
赤庵の門を植那が如くあり心  
重厚

天明改元丑四月

京都書林  
丹波屋庄屋  
横屋治宗

